『それで、なにやら今日から全国のＣＤショップを回っていくんだって？』

『はい！　再始動なので、まずは初心に帰りたくて。デビューシングルが発売されたときにしたことを全部やっていくんです！』

　わたしのスマートフォンから、流りゆう暢ちようなＭＣの質問のあとに、聞き慣れた声が流れる。まいったな。身支度をしながらなんとなくネットＴＶを流していただけのはずなのに、いつの間にか見たい番組が終わっていて、わたしの望んでいない音楽番組が流れている。

『って、大人の人に言われたんやね』

『ちょっとー！』

　スマホのスピーカーから届くざらついた笑い声には、三つの聞き馴な染じみがある声が混ざっていた。わたしが昔所属していたサンフラワードールズの、メロと、桃もも子こと、あかりだ。

　忘れたい過去は振り返らないことにしていたはずなのに、こうして油断したところで不意に、わたしの心を揺さぶってくる。どうしよう、昨日まであんなに毎日が楽しかったはずなのに、暗くて後ろめたい気持ちがどばっと、あふれだしてきた。

『それでは最後に告知、メロちゃんお願いします！』

　ぴくりと、私の肩が勝手に跳ねる。

『はーい！　サンフラワードールズ再始動！　ということで、来週水曜日にダブルＡ面シングルが発売されます！　この曲はサンドーとしては二年ぶりの──』

「っ」

　これ以上、聞いていたくない。

　少し乱暴な気持ちでアプリを閉じると、わたしはそんな気持ちを押し流すように、家を飛び出した。

　　　＊＊＊

　カフェバーのカフェタイムの営業終了後。内装をバータイムのものに切り替えると、私は花か音のちゃんと二人で『最強ガール』の評判をエゴサしていた。

「あっ！　一万いったよ！　やったね」

　動画をアップして数日。私たちの初投稿作品の再生回数は、いまこの瞬間一万再生を超えた。

「……う────ん」

　私はとりあえず喜んでいたのだけど、どうしてか花音ちゃんは不満げだった。

「……どうしたの？」

「いや、なんていうか……もっと評価されるべきっ！」

　いつもの花音ちゃんって感じだったけど、私は思わず苦笑した。

「一本目で一万なら十分じゃない？　……いままでと比べたら」

「う……」

　私がJELEEジエリーのアカウントの過去動画を突きつけると、花音ちゃんはぐうの音も出ないようだった。そこには数百とか、ものによっては数十というやや物足りない数字が並んでいる。

「だけど、これじゃあ……」

　納得いってない様子の花音ちゃんだ。けれどまあ、目標はフォロワー一〇万人だって言ってたもんね。そういうことならまだ足りないか。理想が高いのはいいことだろう。

　なんてことを考えていると、カフェバーの扉が開く。

「ん？　──あ、めいちゃん」

　現れたのはめいちゃんだ。私たちのバイト終わりに合わせて会議することになっている──のだけど。

「そ、それ大きい荷物だね？」

　背中に巨大な布のケースみたいなものを背負っている。

「でぃーてぃーえむ？　の練習をしてたんですけど、操作が……。ここいいですか？」

「あ、うん」

　めいちゃんはうんしょ、とそれをテーブルの一つの上に置くと、ファスナーを開けて、なかから電子キーボードとタブレットを取り出した。

「えっと……トラック？　を作ってみたんですけど、音の波が録音されるものになっちゃって、ロール？　が表示されなくて……」

　なにやらその世界の用語みたいな言葉を発しているめいちゃんを横目に、私は花か音のちゃんと目を合わせた。

「……ヨル、わかる？」

「完全に外国語を話されました」

「だよね」

「そ、そんな……」

　めいちゃんが絶望している。

　と、そこで。私の頭には、助っ人の顔が頭に浮かんでいた。

「しかたない……ここは通訳を頼むしか……」

　こういうときに頼りになるのはやっぱり……機械に強いヒーローだよね。

　数十分後。

『あーそう。それで音は鳴る？』

　キウイちゃんとめいちゃんが、Discordで通話をしている。

「……鳴らないです。エラーが出ました」

『なんて書いてある？』

「えっと……サウンドドライバーがどうとか……どこかのネジが緩んでるんですかね？」

『そのドライバーじゃないんだよな……』

　はあ、とため息の音が聞こえた。花音ちゃんと一緒にカウンターからその様子を窺うかがっているけれど、なにやらダメっぽい雰囲気だ。

「あのさ、キウイちゃん！」

　不意に花音ちゃんが、キウイちゃんに呼びかける。

『うん？』

「もしよかったら……こっちに直接来てくれたりしないかな？　ほら、私まだ面と向かってお礼も言えてないし！」

『あー……それは……』

　キウイちゃんは明らかに言葉を濁した。私は二人にキウイちゃんの噓うそについて話していないから、二人のなかではキウイちゃんは未いまだに立たて北きた高校生徒会長の最強VTuberのままだ。対面することに気まずさやちょっとした恐怖を抱いているのだと思う。

「あーその、えっと！　キウイちゃん忙しいし、さすがに悪いかなーって！」

「ヨルはそーいうとこ遠慮しすぎなんだって！」

　花か音のちゃんがぐいっと肩を組んでくる。

「花音ちゃんが遠慮しなさすぎなの。あと顔近い」

　私は冷静に、花音ちゃんの顔をぐいと押した。

「私とヨルの仲だろ～！」

「どういう仲なのそれは」

「そりゃあ──」

『……じゃあさ』

　花音ちゃんとの無駄なじゃれ合いに割り込むように、キウイちゃんの声が届く。

「うん？」

　私が聞き返すと、

『……山やまノの内うち花音の家でやるなら行く』

「……へ？」

　予想外の言葉に、私と花音ちゃんは顔を見合わせた。

　　　＊＊＊

　新しん宿じゆくのパワレコ。

　あーあ、面倒くさい。なんでサンフラワードールズ不動のセンターのメロがこんなことしないといけないんだろう。ＣＤショップの楽屋でピンモンの缶にストローをさして飲みながら、そんなことを私は考えてる。

「てゆうかー、いまの時代にＣＤショップ巡りとか、アナログすぎません？　世はリモートですよリモート！」

　いまはメンバーとマネージャーしかいないから、せけんてーとか気にしないでずばずばーってこんなことを言っちゃう。そしたらマネージャーが眉まゆをハの字にしながら、

「うーん。けどこの企画……雪ゆき音ねプロデューサー発案だよ？」

「ええーっ、そうなんですか!?」

　だったらメロ、ちょっと失言しちゃったかもしれない！

「それじゃあ私なんかが及びもつかない、深しん淵えんな作戦があるのかもですね！　しゅごい！」

　桃もも子ことあかりは呆あきれたみたいにため息をつくけど、メロはそんなの知らないもんね。雪音ピのためならとやる気を取り戻したメロはぐいぐいサインをしてく。待っててね雪音ピ、私がんばっちゃうんだから！

　さらりさらりと十数枚を書き終えたところで、パワレコの店長さんが楽屋に戻ってきた。

「おおーっ！　サンドーの生サイン！」

「柳やなぎ谷やさんお疲れさまです～！　心を込めて書きましたっ♡」

　ぱちんってスイッチを切り替えて、私はワントーン、いやスリートーンくらい高くて媚こびた声を出す。ここの店長はアイドルとか結構好きらしいし媚びを売っとくと明らかに対応よくなるから、握手会に来るオタクに対応するみたいにぶりぶりで会話しとくのが吉なんだよね。うーんメロって世渡り上手！

「めちゃくちゃ感激です～！　発売当日、店長権限で猛プッシュしちゃいますね！」

「ありがとぉございまぁす♡」

　わざとらしいくらいに鼻に掛かった声は普段からちゃんと女の子と関わりのある若い子からしたらウザかったり噓うそくさく聞こえるらしいんだけど、こーいう大人相手には効果てきめんだ。だからメロは普段の五倍増しくらいでうっざーい声を作ってあげた。

「それから……もし良かったら、あれも」

　マネージャーさんが、店長に目配せしながら入り口を指す。うちの会社の営業が、私たちのかわいいかわいい等身大パネルを運んできた。

「おお……なかなかのサイズですね。置き場所あるかな……」

「難しそうですかね？」

　営業さんが困り眉まゆにしながら言うと、そこでマネージャーさんの電話が鳴った。

「……あ、すみません……雪ゆき音ねさんだ」

　それだけで場の空気にぴりっと緊張が走って、私の胸はどきっと高鳴った。

「はい……はい。いえ、もしかしたら置き場所がないかもとのことで……」

「ああーっ！　そうだ！　そういえば告知モニターの横が、空いてたなー！」

　店長さんは電話に向けて、わざとらしく大声で言った。あはは、おもしろーい。でもでもメロもわかるよ、雪音ピを怒らせたくないもんね。店長の声は雪音ピに届いたみたいで、マネージャーさんが電話口から聞こえる雪音ピの返答に耳を傾ける。

「……『それは正面のモニター横のことですか？』……とのことです」

「い、いや、その……」店長さんは観念したみたいに。「……空けておきます」

　さっすが雪音ピ！　圧力をかけるのが上う手ま～い！　正面のモニター横っていったらエレベーター上がってすぐの一等地だ。嬉うれしくてメロはついぱちぱちーって拍手しちゃって、あからさまにそういうのはやめなさいって、あとでマネージャーさんに怒られた。はーいごめんなさーい。反省はしてないけどね。

　　　＊＊＊

　私は花か音のちゃんとめいちゃんと一緒に、新しん宿じゆく駅東口広場でキウイちゃんと待ち合わせをしている。これから花音ちゃんの家に行くわけだけど、案の定というかなんというか、めいちゃんは激しく震えていた。

「推しの家……。推しっ、推し、推しの家……」

「そんないいもんじゃないよ……ボロアパートに、お姉ちゃんと二人暮らしだし」

「お、お姉さまがいるんですか!?　はわわわわ……」

　花音ちゃんがフォローするように言った一言に余計緊張を増しためいちゃんを横目に、私は花音ちゃんに確認する。

「お邪魔していいの？」

「ま、仕事でほとんど家帰ってこないし……」

「そっか。あ、キウイちゃん」

　会話していたら、改札からキウイちゃんがやってくるのが見えた。黒マスクにフードを被かぶって俯うつむき気味で、やっぱりあまり外に出ることが好きじゃないみたいだ。ちなみにあれから一度、私はキウイちゃんと二人で二年ぶり以上のビデオ通話をしたから、キウイちゃんの見た目が激しく変わっていることを知っている。特に髪色ね。

　到着すると、まずは勢いよく花音ちゃんが挨あい拶さつした。

「はじめまして！　山やまノの内うち花音です！」

「えっと、高たか梨なし・キム・アヌーク・めいです！」

「……どうも。渡わた瀬せキウイです」

　小声で、遠慮がちに言う。花音ちゃんとめいちゃんともDiscordでは何度か喋しやべっていたけれど、こうして対面で話すとなると緊張するのだろう。学校に行かずに引きこもっていたのだとしたら、他人と会うのって本当に数年ぶりとかなんじゃないだろうか。

　パーカの隙すき間まからちらりと覗のぞくピンク色の髪の毛が見えたからだろうか、花音ちゃんとめいちゃんが「あ！」と驚くと、キウイちゃんは嫌な顔をする。

　けれど私は、あまり心配はしていなかった。

「──その髪色、めっちゃかわいい！」

　花音ちゃんが明るく、真まっ直すぐな口調でそんなことを言う。

　ほらね、って思った。なんかこういうところが花音ちゃんなんだよな。

「素敵です！　最近はこういうアイドルもいますもんね！」

　花音ちゃんに続いて言っためいちゃんの言葉にもきっと噓うそはなくて、

「……褒めてもなにも出ないぞ」

　キウイちゃんはちょっと目を逸そらして言う。ぶっきらぼうな言い方だけど、私にはわかる。少なくともこの二人のことを、嫌いだとは思っていなさそうだ。フードを取ると、ピンク色の髪の毛がぐしゃりと揺れた。

「あはは。なにそれ。よろしくね」

「おう。……よろしく」

　改めて言う花か音のちゃんにキウイちゃんがやや気まずそうに返すと、めいちゃんはキウイちゃんの髪の毛をじっと不思議そうに見つめている。

「けど……立たて北きたってそんなに校則緩いんですか？　黒髪清せい楚そのイメージがありました！」

　めいちゃんのごもっともな疑問に、むしろ私が焦る。

「ああっ！　ええっとそれは──」

「ごめん。噓うそだったんだ」

　私の言い訳を遮って、キウイちゃんがさらりと言った。私は驚いて、はっとキウイちゃんの横顔を見る。

「……噓？」

　花音ちゃんが、きょとんと首を傾かしげた。

「……人気者とか生徒会長とか、全部強がりで。私いま、学校行ってないんだよね」

「え。じゃあまひるさんから聞いた話は……」

「全部、作り話。……ごめん」

　気まずい沈黙が流れる。

　そんなとき、花音ちゃんがふっと気を許したように笑った。

「──そっか」

　そして、にかっと笑って、こんな言葉を続ける。

「じゃあ、一緒だねっ」

「え？」

　思わぬ言葉に、キウイちゃんは戸惑っている。私も花音ちゃんがなにを言うのか、わかっていなかった。

「私もほとんど行ってないんだ、学校。まあうちの場合は芸能系の子が多い学校だから、そういう子も珍しくないんだけど！」

　あっけらかんと放たれた言葉には、本音を打ち明けるような親密さがあって。

「そう……なんだ」

　キウイちゃんはどこかあてられたように、花音ちゃんの顔を見ていた。

「つまり！　JELEEジエリーは普通のＪＫが二人に不登校のＪＫも二人という、とってもバランスの取れたグループってことだね！」

　なんだそれ。どう考えてもめちゃくちゃなことを言っている。

　けれど──なんだかすっごく、花か音のちゃんって感じだ。

　キウイちゃんはぽかんとしたあと、呆あきれたようにふっと笑った。

「……それ、バランス取れてるって言うか？」

　数分後。私たちは歌か舞ぶ伎き町ちようを四人で歩いている。前にめいちゃんと花音ちゃんが歩いていて、後ろに私とキウイちゃんが続く。

「お姉さん、稼げる仕事に興味とか……」

「ののたんはそういうことしません！　解釈不一致！」

「あはは！　いいぞ～めい！」

　前では最強のボディガードによってスカウトが撃退されたりしていて、キウイちゃんがそんな二人を「なんだあいつらは……」みたいな目で見ている。

「二人とも、悪い人じゃなさそうでしょ？」

「ええ？」

　不意を打つように私がドヤ顔で言うと、キウイちゃんははあと息を吐いた。

「……ま、スカウトとかナンパよりはマシだな」

　しゃあなしだぞ、って感じで笑うキウイちゃんだったけど、きっとキウイちゃんにしては珍しいくらいのスピードで、警戒を解いてくれている。

「あ」

　歩いているとふと、私の視界にカップティラミスのお店が飛びこんでくる。

　目にとまった理由は簡単。私が最近、気になっていたお店なのだ。

「ね、あそこ寄っていかない？」

「……カップティラミス？」

　花音ちゃんが返事をする。

「おいしそうです！　結構並んでますね？」

　めいちゃんは両手を顔の前で合わせて、素直に目を輝かせた。

「最近ゆこちが紹介してたからねえ。さすがフォロワー三五万……」

「ヨルはホントに流行り物が好きだね？」

　花音ちゃんが呆れたみたいに笑う。

「う……だって美お味いしそうなんだもん」

　JELEEジエリーを始めてからの私はちょっと変わった気がしてたけど、そういうところは変わっていない。ゆこちのフォロワーは着々と増えている。

「いいじゃん。甘いものは大歓迎だぞ」

　キウイちゃんは同意してくれるけど、花音ちゃんは子供をあやすように言う。

「ダーメ。今日は遊びに来たんじゃないんだから」

「それもそうですね……美お味いしそうですけど……」

　花か音のちゃんがさらっと先導して、私たちはそのお店の前を素通りする。

「そっかあ……」

　私がめちゃくちゃ後ろ髪を引かれているのを、「いくよー」って引きずられるみたいに花音ちゃんに引っ張っていかれた。

　　　＊＊＊

「いやぁ～！　やっぱり雪ゆき音ねピしか勝たんだね～！」

　サンドーのメンバーとマネージャーさんと一緒に事務所の車に乗って、メロはすっごくご機嫌な気持ちになってる。雪音ピの名前を出した途端にあの表情、痛快だったなあ。

「メロちゃん、そろそろプロデューサーにピをつけて呼ぶのやめなさい？」

「えぇ～っなんで？　だってプロデューサーってＰでしょ？　だったらピじゃん！」

　マネージャーさんのよくわからない注意にメロは反論した。メロはなんにも間違ったこと言ってないもん。

「プロデューサーの意味で『ピ』って言う人、メロくらいだけどね？」

　桃もも子こが苦笑いしてる。

「けど名前出しただけであれって、やっぱすごいよ。新しん宿じゆくのパワレコだよ？」

　あかりも頷うなずいて、車の後ろの窓からさっき出てきたところを眺めた。

　雪音ピに対して失礼にならないようにと、等身大パネルだけじゃなく店内をずらっとサンドーの宣伝ポップであふれさせてくれた店長。半分脅迫なんじゃないかって思われるかもしれないけど、大人の世界にはこういう駆け引きも必要だってメロは知ってる。引きつった笑いで見送られちゃったけど、これで満足満足なのだ。

「うんうん。だから雪音ピについていけば、間違いなしなんだよ！」

「……だね。……これが売れなかったら私たち……さすがに詰みだし」

　桃子が言う。そんなタイミングで高額バイトの求人広告の宣伝カーが隣を通ったもんだから、メロはちょっと不謹慎だけど笑っちゃった。

「……二年間、しんどかったね」

「うん。私なんて……二十歳になっちゃった」

　あかりの言葉に、桃子がすっごい重たい実感と一緒に頷いた。メロはまだ十七歳だから平気だもーんって思うけど、十六歳と十七歳って全然違ったし、十七歳と十八歳って天と地くらい違うと思う。そう考えるとメロもあっという間に三十一歳、アイドルやってまーすかっこ泣き、みたいになってるのかもしれない。えっ怖い、時間よ止まれ！

「……ってこら。暗い話はやめ。……被害者もいる事件なんだから」

　マネージャーさんの配慮は間違いなく、ののかに殴られた私に向けられてる。

　まあわかるけど。私はつまらないことを言うなあ、と思いながら、車の窓から外を眺めていた。

「被害者……ね」

　　　＊＊＊

「どうぞー」

　私たちは花か音のちゃんの家に到着していた。

「お邪魔しまーす」

「お、おじゃましますっ！」

「うう……ティラミス……お邪魔します」

　キウイちゃん、めいちゃんに続いて私がティラミスを引きずりながら部屋に入る。靴を脱ぐとクラゲの靴下が見えて、気付いた花音ちゃんがにやりと笑った。

「おお……下積み感満載だな……」

　先頭で入っていったキウイちゃんが言う。玄関から奥に向かうと……なんというか、たしかに部屋は散らかっていて、下積みって言葉がしっくりくる。

　狭めの二部屋にロフトがついた一人暮らし用のマンションって感じで、お姉ちゃんと二人暮らしだと聞いていたけど、となるとなかなか狭そうだ。どうやら普段花音ちゃんはロフトで生活しているらしく、ロフトの上には、やっとバイト代で買うことができたらしいマイクとオーディオインターフェース、音の反射を防ぐ防音材などがパソコンとともに配置されていて、そのすぐ近くに布団も敷いてある。秘密基地って感じだ。

　下のフロアにはカップ麵めん、菓子パン、コンビニ弁当の空き容器などが散らかっていて、脱ぎっぱなしの服や、飲み散らかされた酎ハイの缶などを見ると、なんかすごく荒れた生活が想像できる。お酒はおそらく、一緒に住んでいるというお姉ちゃんのものだろう。

「……体壊すよ？」

　私が正直に言うと、花音ちゃんは別に気にしない様子で。

「しょーがないでしょ、料理とか苦手だし」

　めいちゃんは部屋の状況をどう捉とらえるべきか混乱しつつも、なぜかビニール袋を取りだして、その中に空気を詰めている。

「と、とりあえず推しの部屋の空気を……」

「保存するな」

　花音ちゃんがツッコむ。この部屋は解釈違いじゃなかったのだろうか。

　一方キウイちゃんはすごく探るように色々と見回している。鋭い視線だ。

「あんまじろじろ見ないでね？」

　花か音のちゃんに声を掛けられると、キウイちゃんは少し痛いところを突かれたみたいに、

「……すまん、なんでもない。えーと、ＤＴＭだったよな？」

「推し……っ、推しの部屋……！」

　混乱のめいちゃん、まだ二人と打ち解けていないキウイちゃん。

　なんというか正直……これから円滑に会議できそうな空気ではない。

「……ふむ」

　状況を眺めながら思う。

　ひょっとするとここは、普通の女子高生である私の出番かもしれない。

　ぱちん、と手を打って音を鳴らすと、私に三人の注目が集まった。

「ね。それよりもまずはさ──」

　　　＊＊＊

　それから小一時間後。

　花音ちゃんの部屋の机の上にはピザが二枚に、お菓子やジュースとお茶がたくさん並ぶ。私の提案で四人で買い出しに出かけたのだ。

「親しん睦ぼくを深めましょー、ってことで！」

「だから遊びに来たわけじゃ……」

　やや不満げな花音ちゃんだったけど、私はにっと微笑ほほえむ。

「いいの。集団作業っていうのはこういうのが大事なんだから」

　私は珍しく自分の意見を強めに主張した。いつもふわふわクラゲ人間として生きてきた私だからこそ、こういう空気に関することには確信があるのだ。

「そ・れ・か・ら～、じゃーん」

　私はご機嫌な調子を作って空気を暖めながら、傍らのビニール袋から『水族館チョコエッグ』と書かれた箱を四つ取り出した。開けるとランダムで海の生き物のミニフィギュアが出てくる、私の秘蔵っ子だ。

「はい、一人一つずつね」

「わあ！　チョコエッグです！」

「お前、ホントに海の生き物好きだな」

「まあねっ」

　めいちゃんとキウイちゃんも喜んでくれているようだ。

「もう、それ開けたら作業だからね？」

　花か音のちゃんがそう言ったそばから早速、めいちゃんが箱を開けているようだった。

「あーっ！」

　そして、チョコの中からフィギュアを取り出す。めいちゃんの指先には、半透明でなにやらもじゃもじゃした塊がある。

「これは……イソギンチャクですか？」

「あーイソギンチャクかぁ……ハズレだ」

　私が言うと、めいちゃんはあらま、みたいな感じで口のあたりに手を添えた。

「これハズレとかあるのか？」

「そりゃ、イソギンチャクはハズレでしょ」

「まあ……そうか？」

　首を傾かしげながらも、キウイちゃんもそれを開けた。

「お……私はこれ、タコか？」

「タコ!?　当たりじゃん！」

「いやどういう基準？」

　キウイちゃんはきょとんとしている。わからないのだろうか。丸くて赤くて吸盤もあるんだから、こんなの当たりだと相場が決まっている。

「いいなあ。ほら！　花音ちゃんは？」

「まったく……」

　ぶつくさと言いながらも、花音ちゃんは私に流されてくれて、渡してあるチョコエッグを開封しはじめる。

「私は……おっ？　タツノオトシゴじゃん！　やったぁ！」

「ハズレだ……」

「わりと当たりっぽいのに!?」

　たしかに強そうだし竜みたいだしかっこいいのはわかる。けど、だからといって当たりとは限らないのが海の生き物の奥が深いところである。

「いや、だからどういう基準？」

「わからないかぁ……」

　きっと水族館に足あし繁しげく通わないことにはこの感覚は摑つかめないだろう。私はふむ、と眉まゆをひそめながらも、最後に自分のチョコエッグを開封した。

「それじゃあ私は……。……あーっ!!」

「どうしたの？」

　花音ちゃんが私の手元を覗のぞき込んでくる。

「これ！　見て！」

「え！」

　思わずテンションが上がってしまった私だったけど、その理由は花か音のちゃんにもすぐに伝わったようだった。

「……クラゲじゃん！」

　私の手に握られていたのは、プラスティックでできた半透明のクラゲのフィギュア。そりゃ食しよく玩がんだからつくりはチープではあるけど、光に透かすとランダムに反射してキラキラ輝くそれは、まるで本物のクラゲのようでもあって。

「ははは。さすがJELEEジエリーのイラスト担当」

「すごい！　運命です！」

　キウイちゃんとめいちゃんも、楽しそうに祝福してくれた。

「ヨルは持ってるねえ。ちゃんと大事にしなよ？」

　けど私は、そこで一つ思っていた。

　私はクラゲのフィギュアを、花音ちゃんに差し出す。

「え？」

「嬉うれしいけど、これ親しん睦ぼく会かいだから。……JELEEのリーダーの証あかしってことで」

　そしてぽん、と、花音ちゃんが開いた手のひらの上に、それを置いた。

「……あずけておきます」

「っ！」

　花音ちゃんはちょっと照れたみたいに私から目を逸そらすと、「あ、ありがと」とかしおらしく言った。お、なんか結構効いてる？

「……あれ？　花音、顔赤くないか？」

「なんですか、まひるさん匂におわせですか！　私、同担拒否なんですけど！」

「ち、ちがうって！」

　そんなふうに騒いでいる三人を見て、これで少しはいい雰囲気になったかなって、私は安心していた。けどめいちゃんって、同担拒否系のオタクなんだね……。

　　　＊＊＊

　数時間後。

「ＤＴＭ、完全に理解しました……っ」

「ほんとかよ……」

　私がロフトの上で花音ちゃんと作業していたら、下からなんかすごい言葉が聞こえてきた。私も詳しくないけど、たぶんＤＴＭってそんな簡単に完全に理解できるものではないと思います。花か音のちゃんは素直に言葉を受け取ったのか、ロフトの上から下に顔を出して、

「終わったー？」

「おう、こっちはなんとかなりそうだ」

「おっけー！」

　キウイちゃんがいいと言うならいいんだろう。そんなわけで私も一緒に下に降りる。四人でまた机を囲むと、花音ちゃんがいつもの手帳を開いた。

「じゃ、今後の予定決めてこ！」

　そして花音ちゃんは当たり前みたいに、こんなことを言った。

「目指すはフォロワー一〇万人！　ということで次の曲は、来週の水曜日までに出したいって思ってます！」

「「え？」」

「……はあ？」

　私とめいちゃんの声が揃そろって、キウイちゃんは私たち二人より、呆あきれて眉まゆをひそめている感じで返事をした。

「だから……予定に間に合わせるために、これから数日は毎日集まりたいなって！」

　真まっ直すぐ、いつもの調子で言っているけれど、その内容は結構むちゃくちゃだ。

「ま、毎日、ですか？」

　あんなにイエスマンだっためいちゃんも、やや困惑している。

「えーっと、花音ちゃん。私……明後日から普通に、学校があるんだけど……」

「そうだけど！　合間時間とかで集まろうよ！」

「いや……えーと……」

　私が言葉に迷っていると、その表情を察したのか、キウイちゃんは真顔で花音ちゃんを見た。

「あのさ。……そんなのどう考えても無理って、私でもわかるぞ」

　オブラートに包まずハッキリと。

　けれどたしかに、そのくらいの無茶を言っていると私も思った。

「う……。め、めいは!?」

「ののたん、ごめんなさい……私も週に三回レッスンがあるので……毎日は……」

　たぶん、私たち三人が言っているのは真っ当で常識的な言葉だ。けれど花音ちゃんの表情は次第に焦っていき、どこか不機嫌すら匂におってくる。

「けど、それじゃ予定に──」

「いや、予定予定ってさ」

　キウイちゃんの声にも、苛いら立だちが混じりはじめてしまった。

「それって勝手にそっちが立てたもんだろ？　大体なんで水曜日なんだよ？」

「それは……」

　花か音のちゃんは視線をさまよわせる。その目線には力がない。

「は、早いに越したことないでしょ！　こうしてる間にも時間は過ぎてくんだよ!?」

「あのなあ……私だって、配信したり自分の動画を編集したり、やることはいっぱいあるんだよ。学校があるまひるとめいは、余計無理だろ」

　キウイちゃんはイライラを隠さず、真まっ直すぐ正論をぶつけている。もちろんだけどいい空気ではない。

「えーと……次の月末とかじゃダメなの？」

　私からフォローするように、横から現実的な提案をするけれど、

「だけど、間に合わせないと……」

　語尾が弱々しくなって、視線も床に落ちる。なのに意見はまったく譲る様子を見せないのが、なんだかチグハグに見えた。

「だーかーら。何回それ言うんだって。間に合わせるってなににだよ？」

　キウイちゃんが説き伏せるように言う。

「一人で立てた予定にか？　それが来月末じゃいけない理由は？　根拠は？　ソースは？」

「それは……」

「事情がないならみんなに合わせるべき。レスバトル全戦全勝の私と言い争っても無駄だぞ。いまのは完全に山やまノの内うち花音がおかしい」

　半分興がのってきたくらいの勢いで畳みかけるキウイちゃんの言うことは、たしかに正論で。にもかかわらず花音ちゃんがこうも譲らないのは、一体どうしてなのか気になった。

「花音ちゃん。気持ちはわかるけど……足並み合わせないと。みんなJELEEジエリー以外にも、しなきゃいけないことあるわけだし……」

「っ！」

　私が言うと、花音ちゃんは表情を歪ゆがめて、立ち上がった。

「……わかった。私……コンビニ行ってくる」

「え、ちょっと──」

　私の制止も虚むなしく、花音ちゃんは部屋から出ていってしまった。

「ののたん！」

「なんだアイツは……」

「わ、私言い過ぎた……？」

　私がそわそわと言うと、キウイちゃんは貧乏揺すりしながら、

「別に。元々そういうやつなんじゃないのか？　あんな事件起こすくらいだし」

「キウイちゃん、それは……」

　私は窘たしなめるように言う。もともとズバッとものを言うタイプではあるけれど、私は花音ちゃんのことも好きだから、デリケートな部分を刺すような言葉は聞きたくなかった。

「……悪い」

　さすがに言いすぎたと思ったのか、キウイちゃんは素直に謝った。

「……あの！」

　不意に声をあげたのはめいちゃんだった。私たちは、めいちゃんのほうを見る。

「来週の水曜日……でしたよね？」

『サンフラワードールズ再始動！　ということで、来週水曜日にダブルＡ面シングルが発売されます！』

　めいちゃんに見せてもらったのは、数日前に放送されていたらしい、ネットＴＶの音楽番組のアーカイブだった。

「なるほど……な。……まあ、帰ってきたらゆっくり話そう。対抗心ってことなら私もわからなくは──」

　キウイちゃんが納得したように声を漏らすと、不意に。

　玄関のほうから、ドアが開く音がした。

「ののたん!?」

　めいちゃんが声をあげて、玄関へと向いて立ち上がる。

　けれど、近づいてくるドタバタとした足取りは、花か音のちゃんとは違う声を私たちの耳に届けた。

「花音～！　担当のストーリーに被かぶりのネイルが……って、あれ？」

　入ってきたのは、私たちの知らない、栗色の髪の毛で派手なルックスのお姉さんだった。

　　　＊＊＊

　数分後。謎なぞの派手なお姉さんは、私たちのことを聞くこともなく自己紹介もすることなく、めちゃくちゃキウイちゃんに泣きついていた。

「あの背景、絶対伊い豆ずだもん……私とは歌舞伎で済ますクセに～！」

「大丈夫ですって。きっと裏切ったわけじゃないと思いますよ」

「助けて……私をこの沼から……」

　なにやら話を聞いていると、ハマっているホストクラブのホストが別のお客さんと旅行に行っているのをインスタのストーリーに上げていただとかなんとかで、TikTokで千回見たホス狂ってやつの愚痴を生で見れて感激～、みたいな気持ちになっている。とても不毛な時間だ。

　お姉さんは、心から感動したようにキウイちゃんの手を両手で握った。

「ピンク少女……あんた最高にいい女だよ……」

「……はあ」

　キウイちゃんも苦笑していた。

「……で。君たち……誰？」

「順序おかしくないですか!?」

　私は思わず、ツッコんでしまっていた。私の役割ってもうこれなのかな？

「ということで、一緒に音楽グループをやってまして……」

　私たちが身分を明かすと、お姉さんは嬉うれしそうに声をあげた。

「てことはつまり、花か音のの友達!?」

　お姉さんは声を弾ませながら、冷蔵庫から取り出して飲んでいるスト缶の縁を指でなぞる。黒を基調としたゴスっぽいネイルが目に付いて、やはりTikTokでよく見た歌か舞ぶ伎き町ちようがここにある。やがてにへらっと笑うと、ぐいっと一杯あおってみせた。

「ぷはぁっ！　そうかそうか～、ついにあの子にも……。あ、私は美み音おん。あの子の姉で、いまは一緒に住んでんの。で……その肝心の花音が見当たらないんだけど、トイレ？」

「い、いえ……実は色々ありまして……」

　私は濁しながら答える。

「いろいろ？」

「……実はさっき、喧けん嘩かしちゃって」

　キウイちゃんが言うと、

「へえ！　あの子が喧嘩！」

　なんでずっと嬉しそうなんだろうこの人は……。

「……あ、あの！　お姉さま！」

「お姉さま？」

　めいちゃんが緊張しながらあげた声に、美音さんはただでさえぐにゃぐにゃな声を、さらに疑問形でへにゃっと曲げた。

「わからないことがたくさんで……聞かせてくれませんか。私の知らない、ののたんのこと」

　めいちゃんの言葉に、私もはっとする。

「……私も！　……私も花音ちゃんについて、知りたいです」

　すると美音さんは、くすっと優しく微笑ほほえんだ。

「あー……そっか。……君たちなんだ」

「え？」

　そしてまた勢いよくお酒を胃に流し込む。なんかすでにすごい酔ってるっぽいけど大丈夫なのかな。

「ぷはあっ。ううん、こっちの話。普通なら内緒だけど、いいよ。ピンク少女に借りもあるしね」

　得意げにキウイちゃんを見ながら言うけど、キウイちゃんは「はあ」って感じで取り合っていない。美み音おんさんはどんどん酔いの深いところに入っていってる感じがするけど、まあそのおかげで過去を聞けてる感じもするからいい、ということにしておこう。

「あの子って、元々自分でアイドルやりたいって言ったわけじゃないんだ」

「そう……なんですか？」

　私は聞き返して、話の先を促す。

「うち、花か音のが小学生の頃、両親が離婚しちゃったんだけど。花音はそれからずっと、母親にべったりになったんだ。母親が喜ぶことをしたい、あの人の言うことを聞きたいーって。私と真逆よ」

「……そうは見えなかったな」

　キウイちゃんが意外そうに言う。私も同じことを思った。だってなんというか、炎上で引退して、金髪に染めて渋しぶ谷やの街をうろついて。花音ちゃんって親の言うことなんて気にしないどころか、生まれながらの反抗期みたいな印象すらあった。

「えーと。ってことは、アイドルに応募したのがお母さん、とかですか？」

　私が尋ねると、

「えーと、それもちょっと違ってね」

　そんな話を、めいちゃんだけはじっと黙って聞いていた。

「サンフラワードールズのプロデューサー・早はや川かわ雪ゆき音ね。

　その人こそが、うちの母親なんだ」

「プロデューサー……」

　言いながら私はキウイちゃんと視線を合わせるけど、めいちゃんはじっと俯うつむいたまま、床を睨にらんでいる。きっとこの話も知っていたのだろう。

「だからあの子は誰よりもストイックだったし、実際結果も出してた。けど、そのせいかグループではちょっと、孤立しててね」

　私はさっき、私たちと喧けん嘩かしてしまった花音ちゃんの様子を思い出す。

「それで……あの事件があったでしょ」

「事件って……メンバーを殴った、っていう……」

　私の言葉に美音さんは頷うなずいて、さらにごくごくとスト缶をあおる。

「あの子がなんであんなことしたのかは知らないし、事情も聞いてない。けど、引退してから花音はお母さんとも口をきかなくなって、うちに転がり込んできて。ずっと沈んでたのよ。毎日部屋にこもって、外に出たかと思えばエナジーバーと炭酸ジュースを買ってくるだけで。あんた、いつかホントに死ぬよ、って」

　美み音おんさんはそのころの暗い記憶を思い出したのだろうか、はあっとため息をつく。

　そして、また別のことを思い出したように、くすっと笑った。

「けど、近頃はどんどん活き活きしていったっていうか、前向きになっていって──」

「前向きに？」

　めいちゃんが尋ねると、美音さんは窓から見える月を眺める。

「私が酔っ払ってここで寝てたらね。あの子が呆ぼう然ぜんと外を眺めてて、いっちょ前に、月明かりに照らされてたりしてて。なんか、すっごくドキドキした感じの顔しててね。どーしたの、恋でもしたかって聞いたら、言うわけ。『お姉ちゃん、どうしよう……！』って」

　それもきっと、私たちが知らない花か音のちゃんの表情だ。

「で、どうしようって？　って聞いたらね、言うわけ」

　美音さんは照れくさそうに頰ほおをかくと、お姉ちゃんって感じの、大人びた温度で笑った。

「『私最近……毎日が楽しすぎる！』……って」

　美音さんの言葉に、吸い込まれていた。

「……私も仕事ばっかりで、寂しくさせちゃってるからさ。そっか、花音にもやっと、そーいう人ができたんだなって思ってさ。まあ……男じゃないのが意外だったけど」

　酔いでぽーっと赤くなった頰には、けれど大事な家族の幸せを祈る優しさが滲にじんでいる。

「……やばい、語りすぎて頭痛くなってきた……」

「や、単純に飲みすぎじゃないですか？」

　キウイちゃんが冷静に言う。

「ごめん、花音の友よ、そこの缶取ってもらえる？」

　私は目を合わせてお願いされるけれど、

「もう飲まないほうがいいですって！」

「うるさい！　酒に勝てるのは酒だけ！」

　そして自分でスト缶を取って飲みほして、隣の部屋の布団にダイブして寝てしまった。もうなんでもありだな。

「この姉にして、あの花音あり、って感じだな……」

　空になったスト缶を手にとって、からからと軽く振りながらキウイちゃんが言う。

「うん。……けど」

　花音ちゃんが出ていった外を見る。

　いまの話を聞いて、やっとわかった。

　対抗心とか、向上心とかもあったのかもしれないけれど。

　花か音のちゃんはそれよりもきっと──

　嬉うれしくて、寂しかったんだ。

　　　＊＊＊

　また、やっちゃったな。

　一人で新しん宿じゆくの街を彷徨さまよいながら考えているのは、そんなことだった。

　コンビニから菓子パンとお茶だけを買って出たわたしは、街ゆく人を眺める。そういえば今日は酉とりの市いちの屋台がたくさん出ているんだから、そっちを買えばよかったな、なんて思いながらも、北海道のマークが描かれたチーズ蒸しパンを頰ほお張ばっている。甘くてじゅわっと口の中で溶けたけれど、ひとりで食べる菓子パンは寂しくて冷たいってことをわたしは知っていた。

　一緒に買ったお茶で、パンが水分を持っていった口の中を潤す。十一月の新宿の空気は冷たくて、菓子パンも冷たくて、お茶も冷たくて。こんな調子なら飲み物くらいは温かいものを買えばよかったな、なんて思うけど、あとの祭りだった。

　わたしはいつも、自分がこうしたいと思ったら暴走してしまいがちだ。周りから見たらわがままに見えるかもしれないそれも、自分のなかではきちんと理由があって、もっといいものを作ったり、目標に向かって進むためだったりするんだけど、全部の気持ちを共有するのはなかなか難しい。気付けばわたしだけがやり直しを希望していて、そのせいでレコーディングが滞る、なんてことも珍しくなかった。

　それでもわたしには歌う理由があったから、前を向いてやってこれた。いや、ひょっとしたらそう、自分に言い聞かせていただけなのかな。

「……寒い」

　無意味に街を歩きながら、思い出す。

　わかり合える仲間を見つけたかもしれない、って思えたJELEEジエリーのメンバーにも、わたしの幼いところを見せてしまった。いつまでに動画を出さないといけないんじゃないか、こんなふうに歌わないといけないんじゃないか。そういう強迫観念が頭に浮かぶとどうしてもそれを達成しないといけないような気がして、実現しないとわたしは誰かに失望されて、捨てられてしまうんじゃないかと不安になって、いても立ってもいられなくなる。だから目標を実現するために無茶を言って、結局のところ空回りしてしまうのが常だった。

　わたしはずっと、そんなことばかりを繰り返している。

　ホストやぴえんやスーツの社会人や派手な夜職のお姉さんたちがごっちゃになる繁華街。夜の新宿を、橘たちばなののかとは違う色に髪の毛を染めて、アイドルとは真逆の服装をして、自分じゃないなにかになったつもりで歩いていると、わたしも雑多な街の一部になれたような気がして、寂しさが麻ま痺ひした。

　そんなとき。

『すご～い！　ほっかほか！』

　──新しん宿じゆくのサイネージに、わたしのよく知る声が、流れはじめた。

「……え」

　映し出されているのはサンフラワードールズが出演している中華まんのＣＭで、見知った三人が仲よさそうに笑顔を作っていた。肉まん、あんまん、ピザまんを二つに割って、カメラに向けている。

　湯気の立ったそれらは、見るからに温かそうで、美お味いしそうで。

　──寂しく、なさそうで。

　かつての仲間たちは三つを同時に頰ほお張ばると、

『美味しい～！』

　声を合わせて、幸せな笑顔を弾けさせた。

　かたや自分の手のなかにあるのは、冷えきった菓子パンと、味気ない緑茶だけだ。

「っ！」

　三人の表情を見ると思い出す。

『あの──もう一回歌っていいですか？』

　自分の歌に納得のいかなかったわたしが、誰に言われるでもなくリテイクを希望して。

『ね、あそこって、ゲームの挿入歌の、しかも二番のところだよね？』

『ほとんど誰も聞かないのにね』

『なーんか、ののかだけちょっと、温度感違うよね～』

　メンバーに噂うわさされているのを、わたしは知っていた。

　だけどわたしは、こだわりつづけることを、やめられなかった。

　だってわたしには、歌う理由があったから。

　誰かのために歌うっていう、前に進む理由があったから。

　黒髪清せい楚そのサンドーの立ち姿を映した宣伝を最後に、サイネージの映像が終わる。暗くなった画面に、いまの自分の姿が映った。金髪で派手な服装をして、全部に反発するみたいな目つきで画面を睨にらんでいるわたしは、直前に映っていた黒髪清楚のアイドルとも、過去のわたしとも似ても似つかなかったのだけど──

　ほんとうは、そうじゃないのかもしれなかった。

「わたし──なんにも変わってないなあ」

　わたしはきっと、あの頃のままだ。

　わがままを言って困らせて。それはたぶん元をただしたら、自分のためだった。みんなに評価してほしくて、誰かにわたしを必要としてほしくて、だから間違ったわたしが記録として残るのが怖くて不安で、みんなとぶつかりつづけてきた。

　歌のため、グループのためとか言いながら。

　結局はぜんぶ、わたしの欲望のためだった。

「……あーあ。帰れなくなっちゃったな」

　つぶやいて、気がつく。

　そっか。

　わたしにはいま──居場所がないんだ。

　ポケットに手を突っ込んで歩きはじめると、指先になにか硬いものが当たる。

　そこから出てきたのは、クラゲのおもちゃだった。

「あ……」

　──『JELEEジエリーのリーダーの証あかしってことで』

　ヨルの照れたような、はにかんだ笑顔が頭に浮かんだ。

　私が初めて『海うみ月つきヨル』に触れた日の景色が、頭に蘇よみがえる。

　わたしが全部わからなくなったときに、事件みたいに出会って。

　渋しぶ谷やの街で強く自分を主張する、カラフルなクラゲの壁画が、頭から離れなくなって。

　人の目なんて気にしないで漂うクラゲの輝きが、前に進む理由をくれた。

　そんな壁画の作者と一緒に音楽をやれていて、笑い合うことができている。

　これはきっと、奇跡みたいなもので。

　もう、失いたくないな。

　そんなことを思った。

　　　＊＊＊

「け、けど！　私なんかが個人的にお電話をかけてしまっていいのでしょうか!?」

　私はキウイさんと一緒に新しん宿じゆくの街を歩きながら、ののたんに電話をかけるかを逡しゆん巡じゆんしています。あまりにも恐れ多くて──

「いいから早くかけろ」

「は、はい！」

　キウイさんにズバッと言われてしまったので、私は覚悟を決めてかけることにしました。ＤＴＭのときもそうですし、キウイさんは基本的に正しいことしか言わないので、従ったほうがいい結果を生むに違いありません。

「……出ませんね」

「そうか……」

　もう完全に冬の空気になった夜の街、ののたんがこの中を一人で歩いていると思うと、心配でなりませんでした。どうか心までは凍ってしまいませんように。

「めい、なにか手がかり知らないか？」

　キウイさんに聞かれて、私には一つ、思い当たることがありました。

「ミニライブ……」

「え？」

「今日、この後サンドーが花はな園ぞの神じん社じやの酉とりの市いちでミニライブをやるんです！」

　もしもののたんがサンドーを意識していて、そのために無茶を言っていたのだとしたら、気になってその場所に行っているかもしれません。

　けれどどうしてでしょうか。それを聞いたキウイさんは、その場にぴたりと立ち止まってしまいます。

「……？　どうしたんですか！　ライブ会場はあっちですよ！」

　キウイさんは思い詰めた表情で、道路の脇わきから続く裏路地と、華やかな人がゆく明るい酉とりの市いちの屋台が続く方面を、交互に見ます。

　明と暗。隣り合わせなのに対比するくらいにハッキリしたコントラストは、まるで街自体が普通と変に境界線を引いているようで。

「寂しい人間は……そんな賑にぎやかなところ、息苦しいよな」

　キウイさんの言葉はどこか、自分と近い存在を慈しむような響きを持っています。

　それは私に『似たもの同士』と言ってくれたときの、ののたんを思わせました。

「……そっちじゃないと思う。花か音のがいるのはたぶん、もっと──」

　私はキウイさんの視線を追います。すると、道行く高校生の女の子たちが、カップティラミスを持ちながら写真を撮っているのが目に入りました。……カップティラミス。

「キウイさん！」

　そのとき私は、ののたんのアイドルとして一番尊敬できるところを、思い出していました。

　　　＊＊＊

「ののたんは、話したこととか約束とか、……好きなものとか！　覚えてくれるアイドルなんです！　もしかしたら──」

　私が赤髪だったということがわかっただけで、ピアノの演奏を聞きにいく約束をした木き村むらちゃんだって思い出してくれて。たった一回頼んだだけなのに、私の好きな飲み物を覚えていてくれて。

　ののたんは、そういうアイドルなんです。

　キウイさんを先導して走って、私はそこに向かいました。

　到着したのは、今日のお昼に通りかかったカップティラミスのお店。まひるさんが食べたいと言って、ののたんが拒絶した、あの店でした。しかし、店員さんはもう店内の明かりを消して、お店を閉める作業を行っているところでした。

　背が高く髪が短い大柄な黒人さんが、地面に置いてある看板の電気を、いままさに消そうとしています。

「あの、すみません！」

　キウイさんが声をかけると、その店員さんがこちらに視線を向けます。

「ここに女の子、来ませんでしたか？」

「オナノコ？」

「えーと、金髪で……」

　キウイさんが特徴を伝えようとしますが、どうやら日本語が伝わっていないようでした。

「Sorry, my job is only to close the store.I don't speak Japanese.」

「あ、あー……えーと」

　キウイさんが店員さんの英語を聞き取ろうと努力しています。けれど、店員さんはしっし、と私たちを追い払うようなジェスチャーをします。なんてひどい、それがお客さんに対する態度でしょうか。

　それに、なんでも出来るキウイさんにも出来ないことがあったのだと思うと、私は少し安心しました。

　ここは、私の出番かもしれません。

「──May I ask you something?」

　私が、店員さんに話しかけました。キウイさんが驚いて、私をぽかんと見ています。

　ちなみにいまのは『一つ聞いてもいいですか？』という意味で、その前の店員さんは「ごめんなさい、私の仕事はお店を閉めることだけで、日本語はわからないのです」と言っていました。私はこちらを見てくれた店員さんに、丁寧にこう伝えます。

「──Did you see a girl with blond hair and has a super pretty face who's like sunshine, somewhere?（金髪で、顔が最高に可か愛わいくて、太陽みたいな女の子を、どこかで見ませんでしたか？）」

　すると店員さんは、Oh! とピンときたように表情を緩めます。

「That girl went that way!（その女の子ならあっちへ行ったよ！）」

　指差して、ののたんの向かった方向を教えてくれました。人違いの可能性もゼロではありませんが、ブロンドヘアでスーパープリティフェイスでサンシャインライクな女の子なんて、きっと新しん宿じゆくにはののたんしかいません。

「Thanks a lot!（ありがとうございます！）」

「サ、サンキューベリーマッチ！」

　私たちは感謝を伝えると、その方向へと走り出しました。

「……英語、喋しやべれるんだな？」

「はい。母に習ったので。……変ですか？」

　キウイさんはすっごく呆あつ気けにとられた表情で私を見ています。私ってそんなに、英語が似合わないでしょうか？　地毛の赤髪から黒に染めたからですかね？

　店員さんから教えてもらった方向にしばらく走っていると、やがて、金髪の女の子の人影が見つかります。私が、捜していた人です。

「Nono-tan!」

　さっきまでの流れでドラマチックな洋画のような気持ちで言ってしまいましたが、そこにいたのは間違いなくののたんでした。まひるさんが食べたいと言っていたティラミスを六つ持っていて、けれど抱えきれずにわたわたしています。さすがはドジっ子属性です。

「……なにやってんだ」

「や、ち、違う……これは」

　顔を赤くして、ティラミスを隠すように後ろを向いて。どうして隠そうとしているのでしょう。気が変わって、独り占めするつもりでしょうか。食いしん坊属性だとしても推せます。

「はあ……悪かったよ」

「え？」

　キウイさんの言葉にののたんは振り向き、ぽかん、と口を開きました。

「ほら、貸せ。っていうか、なんで六つ？　誰の分だよ」

　ぶっきらぼうに言いながらも、ののたんの荷物を持ってあげているのが、キウイさんの優しいところだなと私は思います。

「……六種類、味があったから……どれが好きかなって……」

「バカか、お前は」

「う、うるさい」

　たじたじになっているののたんも不ふ憫びん萌もえで、私のなかにコレクションされているののたん萌え表情リストに、新たなものが加わりそうでした。

「ほら、行きましょう？」

　ののたんはうん、と頷うなずきますが、やがて私たち二人を、不安げに見つめます。

「……ヨルは？」

　私はキウイさんと顔を見合わせて、にっと笑いました。

　　　＊＊＊

　もう、ほんっとに恥ずかしい。

　無茶を言って断られて、勝手に怒って飛び出して、かと思ったらお詫わびの品なんて買ってるところをバッチリ目撃されて、もうホントにつらいしんどい。

　けど、こうしてわざわざ追いかけてきてくれて、わたしがなにをしようとしてたのかまで、わかってくれて。いままで一人ぼっちで寂しかったから、なんかそんなちょっとしたことが、わたしをとっても嬉うれしくさせた。迷惑をかけておいてそこを嬉しく思ってしまってるなんて、もしかしてわたしって厄介なかまってちゃんなんだろうか。

　わたしはこれからなにが待ってるのかまったくわからないまま、いいからいいから、とかキウイに言われて、そうですそうです、とかめいにまで秘密にされて、企たくらんだように笑う二人の後ろについて帰っている。どうしてヨルがいないのかについては教えてくれなくて、ひょっとして酷ひどいことを言っちゃったからまだ怒ってるのかなって不安になった。

　アパートに到着して、階段を上がる。キウイがドアを開けてくれて、わたしに振り返った。

「ほら花か音の、入れよ」

「い、いや私の家だからね？」

　なんてことを言いながらもドアをくぐると──

「ただい……ま？」

　いつもと違うもわっと湯気のような空気が顔を覆って、クリーミーな良い匂においが漂ってきた。

「……え」

　それだけじゃなかった。悲惨なくらいに散らかっていた部屋が整理整せい頓とんされていて、キッチンには、勝手にわたしの青いエプロンをして鍋なべの前に立っているヨルがいる。

「あ。みんな、おかえり。もう少しだからちょっと待っててね」

　い、一体なにが起きてるの。なんでヨルは当たり前みたいにわたしの部屋をピカピカにして、うちのキッチンでクリームシチューをぐつぐつ煮込んでいるんだろう。何が何だかわからなくて、わたしが部屋を呆ぼう然ぜんと眺めていると、ヨルが顔だけをこっちに向けて、得意げにお玉を掲げながら笑った。

「あ、部屋？　煮込んでるあいだ、時間あったから」

　いや、時間あったから、じゃなくてだね。もう。

　キウイとめいはわざわざ追いかけてくれて、ヨルはこんなふうにお世話みたいなことしてくれて。なんかこの三人、優しすぎない？　だって悪いのは、わたしなのに。

　なんだか喋しやべるといろんなものがあふれてしまいそうだったからじっと黙って、私は女房ですみたいな立ち振る舞いでクリームシチューの味を調整するヨルの後ろ姿を、わたしは口を結んで見ておくことしかできなかった。

　十数分後。ヨル特製のクリームシチューが、食卓に並べられた。

　わたしはまだちょっと現実感のないまま、盛られたお皿の前に座る。

「召し上がれ」

　やっぱりしれっと正妻みたいなことを言ってくるヨルに苦笑しながらも、わたしはそのクリームシチューに釘くぎ付づけになっていた。

「おおー！　うまそうだな。いただきます！」

「まひるさん、ありがとうございます。いただきますね」

　勢いよくシチューをかきこむキウイと、お行儀よく一口ずつ口に運びはじめためいに続いて、わたしも遠慮がちにスプーンを手に取ると、

「……いただきます」

　シチューをすくって、口に運ぶ。ほくほくになったじゃがいもが口のなかで崩れて、優しい甘さが広がった。

　たったそれだけなのに。

　わたしは感極まりそうになって、思わず手を止めてしまった。

「どうしました？」

「……シチューって」

「うん？」

　声だけを届けるつもりだったのにヨルがわたしの顔を覗のぞき込んできちゃったから、わたしは顔を見られないように、ちょっとだけ俯うつむいて。

「……シチューってこんなに、温かかったっけ……」

　ふふ、と嬉うれしそうに笑う、ヨルの声が聞こえた。

　喋しやべったら零こぼれてしまいそうだと思っていた涙。わたしはそれが簡単に決壊させられてしまいそうな気がして、だから誤魔化すみたいに思いっきり、手を止めないでばくばくと食べはじめた。

「おいおい花か音の、どんだけ腹減ってたんだよ」

「食いしん坊のののたんも、むしろありです!!」

「まだまだおかわりもあるからねー？」

　暖かい湯気でぼやけた視界の先。

　三人が顔を見合わせて笑っているのが、少しだけ滲にじんで見えた。

　　　＊＊＊

　花音ちゃんたちが私の作ったシチューを完食したあと。

　私たちは動画制作の作業に移っていた。

「ね、これなら動画に使えそう？」

「あー……ここ、背景透過できるか？」

「あ、だよね了解」

　私はキウイちゃんと話し合いながら、映像を完成させていく。このペースなら、今日だけでもほとんど完成くらいまで進めることができそうだ。

　私たちの横ではめいちゃんがヘッドホンをしながら、パソコンの画面としかめっ面で向き合っている。表情からして明らかに手こずっているみたいなんだけど、めいちゃんＤＴＭを完全に理解したんじゃなかったんですかね。

「ねえ……」

　そんなとき。

　作業に集中できない、といった様子で不安げな声を漏らしたのは、花か音のちゃんだ。

「……三人とも、そろそろ帰り大丈夫？」

　その表情は、まるで捨てられることを恐れる子供のようで。

　私は改めて、そっか、って気がつく。

　花音ちゃんはきっと、強いけど弱いんだ。

「なーに言ってんだよ」

　キウイちゃんがへへっと、キウイちゃんらしく笑う。

「週に何回も集まるのは難しいかもしれないですけど……」

　めいちゃんがお淑しとやかに、めいちゃんっぽく笑った。

「今日は、トコトンやろうよ」

　だから私も私らしく、花音ちゃんに笑いかけた。

「みんな……」

　だって、私たちは決めたのだ。

　美み音おんさんから話を聞いて、花音ちゃんの気持ちを少しだけ、多分ほんの少しだけだけど、理解できて。

　だったら私たちの生活に影響が出ない範囲でなら、全力で寄り添おう、って。

「けど、どうして急に……？」

　そう言われると、わりと困った。

　だって私たちが意見を変えたのって──

「えーと。実は美音さんから昔のこと、いろいろ聞いちゃって……」

　私がしどろもどろに白状すると、花音ちゃんの表情は「え」と一気に不安に染まる。ちなみにその美音さん当人はいまだに、仕切られた部屋の向こうで爆睡している。

「ごめんなさい、聞いたのは私なので、悪いのは──」

　めいちゃんが申し訳なさそうに言うのを、

「──私は、さ」

　キウイちゃんの声が遮った。

　私たち三人の視線がキウイちゃんに集まる。私はキウイちゃんがこれからなにを話そうとしているのか、想像できなかった。

「小学校まではクラスのスーパースターだったんだ。けどそこからの転落はひどいもんでさ」

　芸人の笑い話のような流りゆう暢ちようなトーンで語られたのは、キウイちゃんの過去の恥ずかしいエピソードだ。

「まひると別れて都内の中高一貫の進学校に行ったって話しただろ？　その初日の入学式のあと、自己紹介があったんだけど──」

　抑揚をつけて、配信で培ったスキルをフル稼働して。まるで自分を情けないものとして自虐して聞かせるそのコミカルな語り口は、さすがは人気VTuberって風格だ。

「──ってな感じで大スベり！　あの瞬間、私の学校生活は終わったと確信したね」

「そんなきっかけだったの!?」

　私の知らない話だったから、私はそういう意味でも驚いていた。まさかあの中学一年生のときの私との電話が、ノクスの始まりだったなんて。

「キウイさん、面白いです！」

　めいちゃんは大きく笑っていて、花か音のちゃんは口を半開きにしながら、キウイちゃんを見つめている。でも、そうだよね。

　聞かれたくないだろう過去を聞いてしまったぶん、自分の恥ずかしい話もしてみせる、なんて、本当にキウイちゃんらしい、天あまの邪じや鬼くな励まし方だ。

「あはは。……ありがと」

　きっとその意図を察したのだろう、花音ちゃんは目を伏せながらしみじみと微笑ほほえむと、柔らかい声で言った。

「──なんのこと？」

　キウイちゃんは、得意げにふふん、と笑った。

　まったく。だったらそのドヤ顔をやめるんだね。なんて思ったけど、それもまた可お笑かしくて、かっこよかった。

　花音ちゃんとキウイちゃんはしばらく目を合わせる。やがてキウイちゃんが「見すぎ」というツッコミを入れると花音ちゃんが顔を赤くして、「なにもう！」とかあわあわと言っている。

　さっきまではあんなに喧けん嘩かしていたけれど、うんうん。雨降って地固まるってやつだね。買うべきはチョコエッグじゃなくてカップティラミスだったか。

「じゃ、じゃあ次は、私の番ですね！」

　めいちゃんもキウイちゃんの意図を汲くんだようで、緊張した口調で言う。ぶっ飛んだところもあるけれど、人の優しさには気づける、優しい子なんだよね。

「実は私……歌が大の苦手で……」

「え。ピアノはあんなに上手なのに？」

　私が聞き返すとめいちゃんは頷うなずいて、恥ずかしそうに、話を始めた。

　めいちゃん曰いわく──中学生の頃。

　歌のテストで歌うのが恥ずかしくて声が震えてしまい、クラス中から失笑されてしまった。歌えば歌うほど震える声。辛つらくてどんどん涙目になっていったけれど、めいちゃんはがんばって歌っていたらしい。けど。

「──『高たか梨なしさん。もう大丈夫ですよ』って、先生にまで止められてしまって……。それで、もっとくすくす笑われてしまったんです」

　めいちゃんは悲しそうに、寂しそうに。

「先生にまで止められたのがすっごくショックで……まるで私が変だって、世界に決められちゃったみたいで……」

「ちょっと、わかる」

　ぼそりと、キウイちゃんが言葉を落とした。

「先生にまで言われるとさ……自分のこと、信じられなくなるよな」

「そうなんです!!」

　めいちゃんが激しく同意して、うんうんと頷うなずき合っている。なんかこの二人もすごくデコボココンビな気がするけれど、仲良くなれてきたみたいでよかったよかった。

「めいも……ありがとっ」

「いいえ。ふふ。…………でゅふふ」

　最初はお淑しとやかな笑みで綺き麗れいに締まりそうだったのに、めいちゃんは途中で我慢できなくなっていつものオタクスマイルに移行してしまった。けど、そんなところがめいちゃんらしいし、私はもう、そのほうが居心地がよかった。

　しかし。そこで私は気がついていた。

　──となるとえーと、次は。

「えーと！　私は……私は」

　こうして二人が恥ずかしいエピソードを披露したのだから、なにか自分も喋しやべらないといけない、みたいな感じがしてくる。そんな考えは空気読みすぎな私の悪い癖だろうか。

「あはは。別に義務じゃないんだぞ？」

　キウイちゃんは言ってくれるけど、たぶんJELEEジエリーの人間関係円滑担当大臣としてやっていくことになるだろう私だから、ここで一人だけなにも言わないわけにはいかない。

　けど私ってやっぱり普通の女子高生だから、三人みたいに鉄板の過去エピソード、みたいな引き出しがあるわけではなくて。

「……あ！」

　うーんと考え込んだ結果、私の頭に浮かんだのはやっぱり普通の女子高生らしい、修学旅行の夜にＪＫが話しそうな告白だけだった。

「なになに？」

「えっとね」

　そして私は思いついたそれを、ちょっと照れながら言葉にする。

「実はいま……ちょっと気になってる人がいて」

「「ええ!?」」

　花か音のちゃんとキウイちゃんが、ぐいっと身を乗り出して、大声を出した。

「……へ？」

　思ったよりも大きいリアクションに、私は困惑した。

　　　＊＊＊

　みんなの思いを共有しあえて数時間後。

　私たちのＭＶ作りは、佳境を迎えていた。

「ね！　ここ、ちょっとだけ歌詞変えてもいい？」

「この歌詞なら、ここの旋律、ぐいっと明るくしたいです！」

　花音ちゃんが言うと、めいちゃんがそれに対応する。

「私このフレーズ好きだな…………差分、もう一枚描きたい！」

「とりあえず録音できたものから送ってくれ。リアルタイムでミックスしてくから」

　私の熱量も、キウイちゃんがまとめ上げてくれた。

「……もう一杯飲みたい……」

　隣から聞こえる美み音おんさんの呻うめき声は……まあ、あんまり関係ないね。

　カーテンから、朝の陽が差し込んでいる。

　結局全員で徹夜してしまった私たちの目の前にあるタブレットには、YouTubeの動画アップロードの画面が表示されている。寝ぼけ眼でマウスを操作しているのは花音ちゃんだ。

「タイトル、概要欄、サムネ……これで、問題ないよね……？」

「おう……あってる」

　花音ちゃんは眠い目を擦こすりながら、キウイちゃんに最後の確認をする。

「で……ここだよね？」

「ああ……そこだな……」

　今後インターネット担当大臣を担うであろうキウイちゃんが眠そうに答えて、花音ちゃんが指示された場所をクリックすると、画面が切り替わって動画がアップされはじめた。

「こ、これで……？」

「あとは……待つだけだな」

「で、できたーっ！」

　花音ちゃんが声をあげると、私たち三人も顔を見合わせて、喜びをわかちあう。

「「「やったーっ！　……っ！」」」

　声を合わせて喜びを共有すると、私たちはばたり、ばたり、と順番に倒れて、眠りに落ちていった。メイクも落としてないしこんなところで寝たら体がバキバキになってしまいそうだったけど、まあ、今日くらいはいいよね。

　薄れていく意識の隙すき間ま。

　JELEEジエリーチャンネルの動画欄に私たちの二つ目の楽曲、『月の温度』のＭＶが加わるのを見ながら、私はこんなことを思っていた。

　なんだかこの瞬間に初めて──JELEEがJELEEになれたような気がするな、なんて。

　　　＊＊＊

　ののたんが……いっぱい……。

　……ののたんの……統べる国……。

　……はっ。

　私が幸せな夢から目を覚ますと、そこはいつもと違う景色。そうだ、私はいまののたんの家にいて、みんなと徹夜して動画を作ったんでした。

　どうやら四人の中で最初に目を覚ましたのは私みたいで、ののたんもほかの二人もぐっすりと眠っています。

「ん……？　──えっ!?」

　私はＤＴＭは完全に理解しましたが、ＸとかＳＮＳのことはよくわかりません。けど、ここの数字が伸びるとすごいんだとキウイさんが言っていたことは、覚えていました。

「……みなさん！　あーるぴーが！　あーるぴーが！」

　私は体を揺すって、三人を起こします。ののたんはお姫様だから普通に起こすのではなくキスが必要かと思いましたが、そんなことをしたら今度は私がおかしくなって意識がなくなってしまうので、普通に起こすことにしました。

「……ぅん？」

　眠そうに目を擦こすりながら起きてくる三人に、私はタブレットの画面を見せます。

「こ、これ！」

「……えーと？」

　そして三人はそれを見て、目を見開きました。

「「「ええええぇぇぇ!?」」」

　その画面の中では、私たちが告知した投稿のあーるぴーが、八〇〇〇を超えています。

　三人は声を揃そろえて、こう叫びました。

「「「なんかバズってるー!?」」」